

市長賞

堺市立 晴美台中学校 三年

栗田 紗菜

すべての人に幸せな居場所を

私はあたりまえの生活をしていると思っていた。しかしグリ下の子供たちのあたりまえとは違った。

私は五大家族だ。父と母と妹と弟がいる。学校が終われば家へ帰り、家族と色々な話をし、ご飯を食べてゲームをする。そんな生活があたりまえだった。そして週末になれば祖母が家に遊びに来てくれる。勉強の話や部活の話、最近気になってお菓子のお話など何でも気兼ねなく話している。そんな生活が恵まれていることだと知ったのは、「グリ下、さまよう子供達の心」というニュースを見たときだった。

グリ下とは、道頓堀にあるグリコの看板の下の遊歩道のことだ。そこは近年再開発された場所で観光客などにも人気の場所だそう。そんな一見すると華やかで明るいその場所に十代の若者が集まっている。家庭内暴力を受けているネグレクト状態にある子供、自分の家なのに居場所の無い子供だった。その子供達に私の思うあたりまえは何一つなかった。その子供達のもとには、犯罪に誘い込もうとする大人達もたくさん集まってくる。寂しさの中、掛

けられた声に小さな喜びを感じ、飲酒や、喫煙、万引きなどの犯罪に手を出してしまう子供達が多いそうだ。

私をはじめ道頓堀を訪れたのは中学二年生の春だった。新型コロナウイルスが収まったこともあり、外国人観光客も多くとも賑わっていた。テレビで見る風景を目の前にし、家族でたくさん写真撮った。グリ下の人々も、風景に溶け込み、ニュースで報道される場所とは全く想像がつかなかった。

人間は誰もが弱く、支え合うことを無意識に求める。特に私たちのような十代は、まだまだ未熟で、支えようと優しく近づいてくる大人達の本当の心を見抜くことは難しいと思う。自分の話に耳を傾けてくれる事に安心し、信用してしまい、犯罪に手を出してしまう。そんな子供達を救うために、私たちには何ができるだろう。

私自身、両親や兄弟と会話することをとても大切に思っているが、友人や先生に相談に乗ってもらうことで救われることもたくさんある。実際の学校生活や友人関係において家族より理解して

もらえることが多いからだ。私でも友人や周りの人たちの話を聞くことで、その人の悩みを少しでも軽くしてあげられるのではないだろうか。他人の家族の関係改善など私たちにはできない。だから、せめて、同じような境遇の同年代で面と向かって話ができる場所を学校に作れたらと思う。解決を求めるのではなく、ただ気持ちを吐き出せる、ただ聞き合える、ただ共感し合える。そんな場所があれば、グリ下を居場所だと思いこむ必要はなくなるのではないだろうか。

私には、いつでも相談ができる両親がいて、他愛もないことで笑い合える友達がいる。そのような生活をあたりまえと思えていくことはとても幸せなことなのだと思った。グリ下の子供達には家という大切な居場所がないという事実には変わりはない。しかし、一つでも多くの居場所があれば、孤独や寂しさを軽くしてあげられるかもしれない。その一つ一つの積み重ねが未来の笑顔に繋がるのを信じていたい。

